

## 保育士のワークライフバランス確立に向けた基礎研究

—生活バランスに関するアンケート調査結果分析—

八 田 清 果

### Basic research for establishing childminder'work-life balance

— Analyzing the result of survey on the gap between their present work-life balance and their ideal one —

*HATTA Sayaka*

キーワード：ワークライフバランス、生活、  
保育士

#### 1. 問題意識

保育所の待機児童が大きな社会的関心を集めてから数年が立ち、小規模保育等も含めた保育所の整備等多くの自治体がこの問題に取り組んでいる。しかしながら、完全なる解決には至っていない。保育所の待機児童の問題の背景には、保育士不足があることは明白である。これについても、待遇改善など対策は取られているが解決する方向には至っていない。

この問題について保育士不足に至っている背景から考えてみたい。平成30年6月現在全国保育士養成協議会に加盟している学校は546校あり、毎年多くの保育士を出している。また、保育士の国家試験においても毎年1万人前後の合格者を出している。このことから毎年多くの保育士が誕生しているはずである。第1回保育士等確保対策検討会資料である「保育士等における現状」によれば、保育所保育士（常勤のみ）の2年未満での離職率は14.9%であり、経験年数が低い層（7年以下）の保育士割合が半数となっている<sup>1)</sup>。つまり、定着率の低さが保育士不足の背景にあるのではないかと考えられる。

また、一方で現在の保育士は、子どもへの養育だけでなく、障害等の多様な子どもへの対応、虐

待を受けた子どもやその家族を含めた支援、地域の子育て家庭への支援など難易度の高い支援に対応することが求められている（『保育所保育指針』）。経験年数が低い層の保育士もこうした複雑で幅広い課題に対応するため、試行錯誤しつつ日々保育に携わっている現実があり、その負担は勤務時間外の生活にも影響しているのではないかと推察される。

ちなみに、「保育」「早期離職」というキーワードを使って、論文検索をした結果、この10年間で28本の論文が発表されている。その内容は、保育士養成校の卒業生調査に基づいたもの、早期離職の要因分析や防止のための研究が多く、特に要因に関しては人間関係等の保育士自身の課題に重点を置いたものである。保育現場への他職種配置という観点からは泉浩徳・田中朋也（2017）<sup>2)</sup>のスクールソーシャルワーカーの業務から幼児期における配置の有効性についての論文が1本あっただけである。

こうした中で、本研究においては、保育士の生活と働くことのバランスを整える（ワークライフバランス）ことで保育士として長く働くことが可能となり、その結果として保育士不足が解消され、待機児童問題等の解消にもつながるのではないかとこの観点から研究を進めていく。そこで、まず初めに現場で働く保育士がどれくらい働き、どのような生活（仕事と家庭生活等のバランス）をしているのか実態を把握する必要があると考える。

## 2. 研究の目的と方法

現在の保育士の生活という視点から分析し、保育士のワークライフバランス確立のための基礎研究としたい。

そのため、保育園で働く保育士に対する生活バランスに関するアンケート調査及び生活時間調査を実施した。現在は、その結果分析の途中である。本稿では、そのうち、保育士自身が自分の生活をどうとらえているのかに焦点を当て生活バランスに関するアンケート調査結果と分析をしていきたい。

実施対象は、同一社会福祉法人の5園155名。調査実施期間は、2019年11月～12月とした。調査回答者は101名であった。

## 3. 研究における倫理的配慮

研究・調査にあたっては、個人情報保護法および申請者が所属する埼玉東萌短期大学の個人情報保護方針に基づき、個人情報を保護するとともに情報漏洩の防止に十分配慮する。また、研究においては個人が特定されるようなことがないように十分に留意する。また、学校法人小池学園の研究倫理に係る諸規程に基づき、事前に目的、結果報告の方法等を説明し、了解を得てから調査を実施した。

## 4. アンケート調査回答者の概要

同一法人の保育園5園155名に配布し、101名の回答があった（回収率65.2%）。各園の配布人数、回答者数、回収率は表1の通りである。

表1：園別配布数・回収数・回収率

	配布	回収	回収率
A 保育園	30	25	83.3%
B 保育園	30	18	60.0%
C 保育園	40	32	80.0%
D 保育園	25	15	60.0%
E 保育園	30	11	36.7%
	155	101	65.2%

調査回答者の概要を以下の項目から見ていく。

### (1) 勤務形態

現在の職場での勤務形態について聞いた。図1の通り、全体の約2/3（67%）が常勤職員、残りの約1/3が非常勤職員・パート等であった。

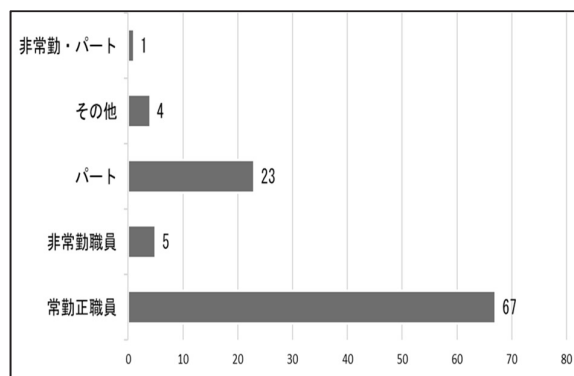


図1：勤務形態

### (2) 性別

図2の通り、圧倒的に女性が多いが、回答者の1割は男性であった。

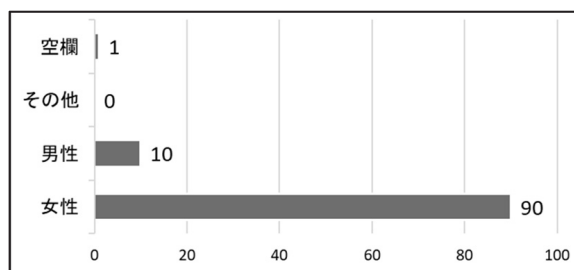


図2：性別

### (3) 年代

調査対象者の年代について尋ねた。結果は図3の通り、30歳代、20歳代がやや多く、次いで50

歳代が多いという順であった。

『令和2年版少子化社会対策白書』によると、2018年の日本の初婚年齢の平均は「夫が31.1歳、妻が29.4歳」（内閣府2020：p15.）<sup>3)</sup>となっており、「出生時の母親の平均年齢を出生順位別にみると、2018年においては、第1子が30.7歳、第2子が32.7歳、第3子が33.7歳」（内閣府2020：p15.）<sup>3)</sup>となっている。40歳代といえ、こうした日本の平均にあてはめた場合、第1子が小学生～高校生の年代であり、子育て真っただ中と言える。もしかしたら、そうした年代では一時仕事から離れる人もいることが、40歳代がやや少ない理由かもしれない。

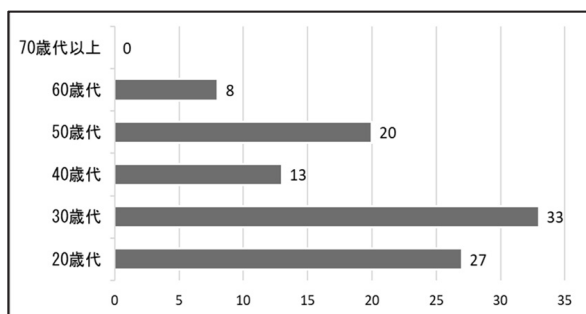


図3：年齢

#### (4) 現在の勤務園での勤務年数

現在の勤務園での勤務年数を尋ねた。結果は図4の通り、1年未満が10%、1年から3年未満が26%、3年から5年未満が24%、5年から10年未満が31%、10年以上が8%となっており、こちらも若手、中堅、ベテランがバランスよくいることがわかる。

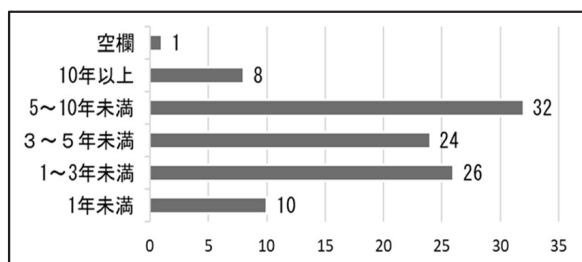


図4：現在の園での勤務年数

第1回保育士等確保対策検討会資料である「保

育士等における現状」によると保育所保育士（常勤のみ）の2年未満での離職率は14.9%であり、経験年数が低い層（7年以下）の保育士割合が半数という調査結果がある<sup>1)</sup>が、今回の調査でも現在勤務する園で5年以上働いている職員（比較的経験年数が高い職員）は39%となっていた。ただし、今回調査に協力いただいた保育所のうち3園が自治体からの受託や設立が10年未満の園であるということもあり、そもそも園自体が新しいため、長く勤務している職員が少ないということもあり、早期離職や定着率の低さとすぐには結びつけることはできない。

#### (5) 職歴（働き出してから年数）

働き出してから年数（職歴）を尋ねた。結果は、図5の通り、1年未満が5%、1年から3年未満が9%、3年から5年未満が14%、5年から10年未満が28%、10年以上が44%となっており、ベテラン、中堅、若手とバランスがよいことがわかる。職歴としては、5年以上が72%と比較的経験年数が高い職員が多くいることがわかる。5年以上という比較的経験年数の高い職員が、職歴で見ると72%いるのに対し、現在の職場での勤務年数で見ると39%となっている。一見すると定着率の低さに注目してしまいそうになるが、(4)でも言及したように、設立（区からの受託）10年以上の園が2園のみということもあり、一概に定着率の低さと結びつけることはできない。

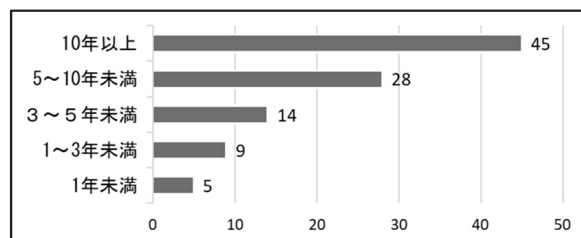


図5：職歴（働き出してから年数）

#### (6) 居住形態

回答者の居住形態を尋ねた。図6のとおり、「自分家族との同居」が最も多く、次いで、「実家と同居」、「一人暮らし」の順となっている。

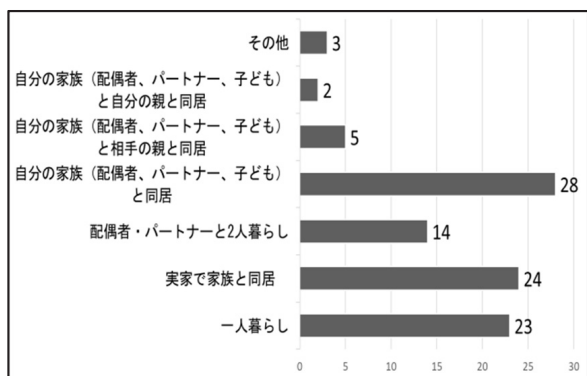


図6：居住形態

今回の調査回答者は年齢としては、20歳代、30歳代がやや多いものの、「実家で家族と同居」、「一人暮らし」でも生活は大きく異なる。また、パートナーとの同居であっても子どもがいるのか、親と同居しているのかでも生活スタイル及び時間の使い方も大きく異なってくると考えられる。また、今回の調査の回答からはひとり親世帯であると思われる者も一定数見られた。

## 5. 生活バランスに関する調査結果概要

生活バランスに焦点を当てアンケート調査を行った。質問項目は、(1) 自分時間の使い方、(2) 仕事・家庭生活・個人(自分)の時間配分における①現在の自分の生活、②理想の生活のバランスについて、(3) 自分の理想の生活に近づけるためには、どのような改善・工夫等(自分・周りの環境等も含めて)が必要かという3点である。この結果から分析・考察を行う。

### (1) 時間の使い方について

ここでは、自分時間の使い方について、「睡眠」、

「食事」、「仕事」、「家事」、「趣味・娯楽」、「学習・研修・習い事」、「団らん・家族とのかかわり」、「つきあい・交際」、「地域社会活動」の9項目それぞれで、①「増やしたい(もっと欲しい)」、②「今のままでいい」、③「減らしたい」のいずれに当てはまるのかを聞いた。結果は図7の通りである。

その結果、時間を増やしたいと考えている項目としては「睡眠」「趣味・娯楽」が多くいた。逆に時間を減らしたいと考えている項目としては「仕事」としている人が最も多い。しかしながら、「仕事」の項目だけを見ると、「今のまま」と答えている人が最も多く、「仕事」に関しては「今のまま」の時間で満足している人もいれば、「減らしたい」と考えている人も半数ずつ程度いることがわかる。

この結果については、その回答者の勤務形態によっても分かれるのではないかと推察した。そこで、勤務形態別の「仕事」に関する時間の使い方の結果が表2である。こうしてみると、常勤正職員は、「今のまま」と「減らしたい」が同数で最も多く、非常勤職員やパートでは「今のまま」が最も多いということが分かった。そもそも非常勤職員・パートと常勤正職員とでは勤務時間の長さが異なる。回答者それぞれの生活時間調査の分析を進めていくとわかると思うが、その勤務時間の長さの違いが「今のままでいい」と「減らしたい」の差につながっているのではないかと考えられる。全体を見ると9項目中「食事」、「家事」、「学習・研修・習い事」、「団らん・家族とのかかわり」、「つきあい・交際」、「地域社会活動」の6項目では「今のまま」が最も多くなっている。これら一つ一つの

表2：勤務形態別に見た「仕事」に関する時間の使い方

(n=101)

	1 増やしたい	2 今のまま	3 減らしたい	4 その他	未記入
常勤正職員	3	30	30	1	0
非常勤職員	0	4	1	0	0
パート	2	19	1	0	1
その他	1	1	2	0	0
非常勤職員・パート	0	1	0	0	0

※4その他の回答者は、2「今のまま」と3「減らしたい」をどちらも選んでいた。

項目もその人によってどれだけ時間を使っているのか異なる。そのうえで、回答者各自がそれに満足しているのかがこれらの結果に反映されていると考えられるが、各自がどれだけ時間を割いているのかは、生活時間調査を分析してみないとわからない。今後、各自の生活時間調査を分析する中で、さらに考察を深めていきたい。

(2) 仕事と家庭生活・個人（自分）の時間のバランスについて

仕事と家庭生活・個人（自分）の時間のバランスについて、現状と理想について聞いた。その結果は図8の通りである。現状としては、「仕事」を優先している人が最も多い。理想としては、「仕事・家庭生活・個人（自分）の時間」どれも優先するが最も多かった。この結果からもわかるように、現状としては、生活の中での時間の使い方として「仕事」が優先になってしまっているが、理想としては「仕事」も「家庭生活」も「個人（自分）の時間」もどれも大切にしたいと考えている人が多いということである。

(3) 自分の理想の生活に近づけるための改善・工夫等について

自分の理想の生活に近づけるための改善・工夫等について自由記述での回答から分析する。自由記述の内容から「職場への要望」、「自分の改善」、「あきらめ」の大きく3つに分類することができた。

カテゴリー	主な内容
職場への要望	仕事量、仕事効率化、分担、人員配置
自分の改善	家事効率化、だらだらしない、仕事スピード上げる、仕事の優先順位をつける、心の余裕を持つ
あきらめ	どうしようもない、これ以上どうしようもできない、退職・転職しかない

これらを見ていくと、「家事の効率化」や「だらだらしない」等仕事以外の時間をどうにかしようとする人がいる一方で、「職場への要望」グループを含め、「自分の改善」、「あきらめ」グループの多くの方は仕事の時間をどうするかに焦点を当てて回答している。(2)の仕事と家庭生活・個人（自分）の時間のバランスでの回答とも関係

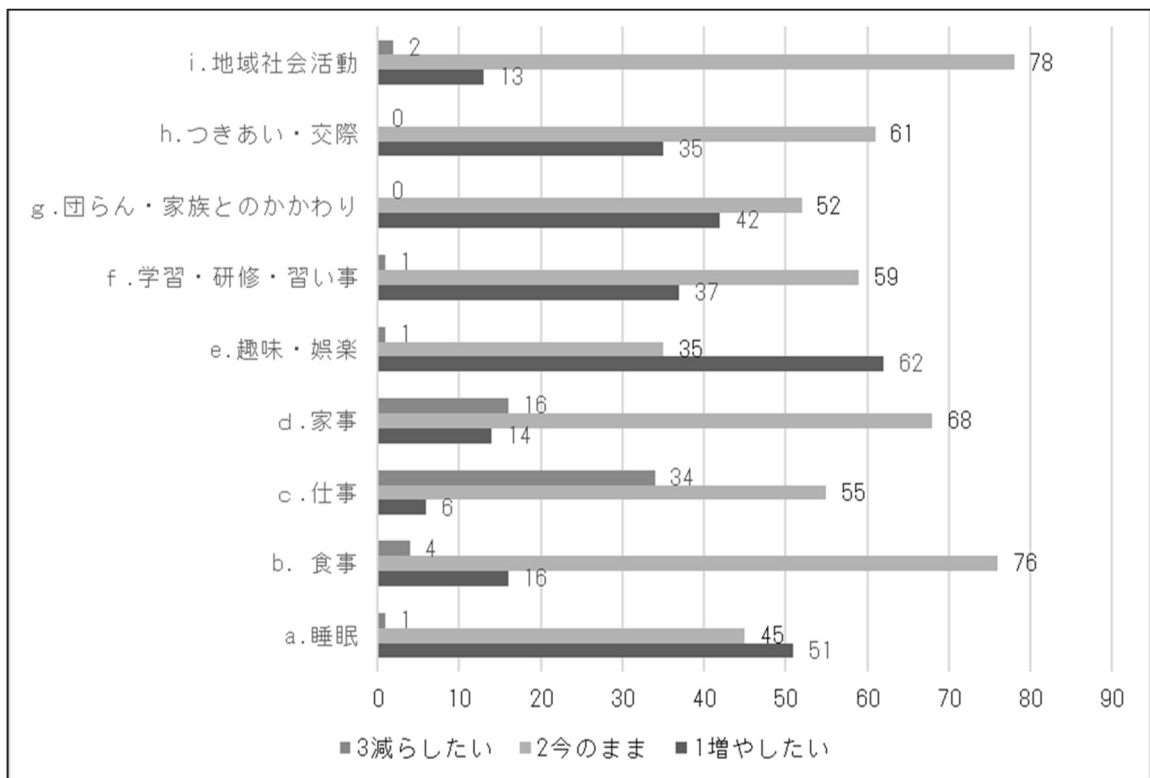


図7：自分の時間の使い方について



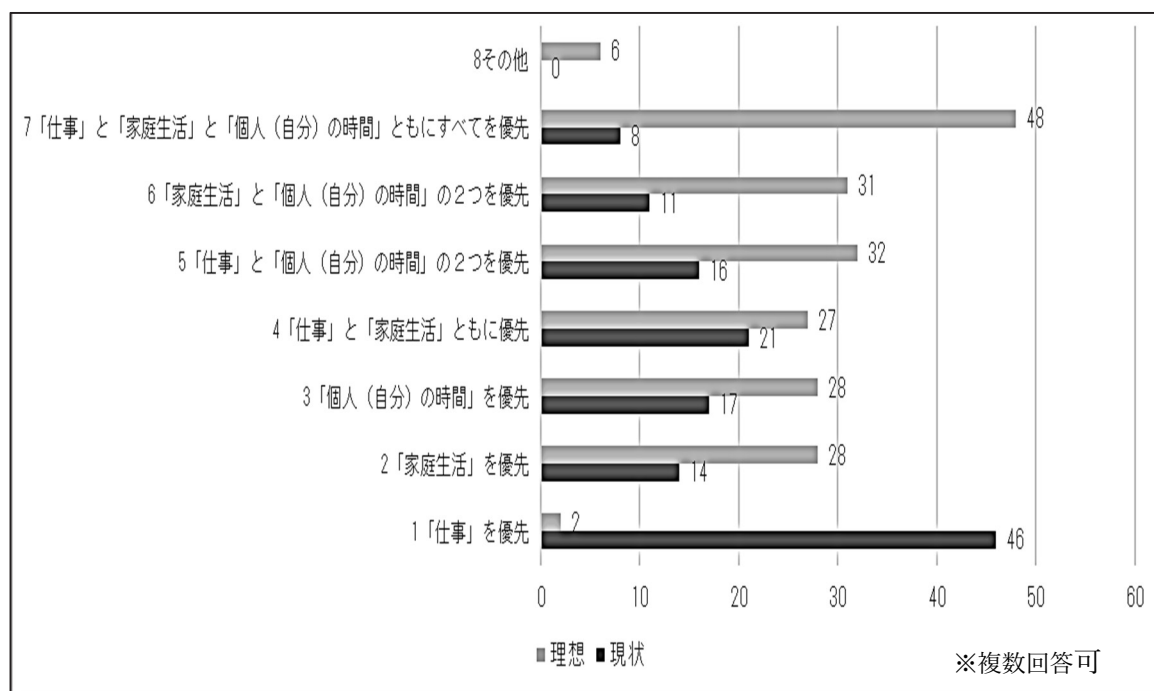


図8：仕事と家庭生活・個人（自分）の時間のバランス

するが、現状「仕事」優先の人が多くからこそ、その「仕事」をどうするかが理想に近づける方法と考えている人が多いことがこの回答からもわかる。

これらのことから、保育士として社会で働き、生活するというワークライフバランスを考える中で、「仕事」をどうするか、どういう働き方をすることが、それぞれの生活バランスを整えていくためにも重要であるということが改めて分かった。

## 6. 今後の課題及び展望

保育士自身が自分の生活をどうとらえているのかに焦点を当て生活バランスに関するアンケート調査の結果分析を行う中で、現状として「仕事」が優先で生活している人が多いこと、しかしながら理想は「仕事・家庭生活・個人（自分）の時間」を優先したい人が多いことがわかった。また、こうした理想に近づけるためには、「仕事」の仕方等をどうするかに焦点を当てて改善を考えている人が多いこともわかった。

今回の調査では、保育士自身が自分の生活をどうとらえているのかがわかる調査（回答者の主観

に近い）であったが、社会人として働くにあたり、やはり「仕事」というものが生活の中心にある人が多い。このことから、今後、保育士のワークライフバランスを考えるにあたり、生活を豊かにするにしても、この「仕事」をどうするのが重要になってくることが改めて分かった。

生活時間調査の集計も併せて進めているところであるが、こちらの分析を進めるとさらに、各自が1日の生活の中でどのように時間を使っているのかより客観的なデータが得られると考える。その結果を踏まえ、保育士のワークライフバランスの確立を目指すためには、何を改善したらいいのか、どこに課題があるのかも含めて検討していきたい。

## 引用文献

- 1) 平成27年11月9日第1回保育士等確保対策検討会資料4「保育士等における現状」より
- 2) 泉浩徳・田中朋也(2017)「スクールソーシャルワーカーの現状からみた幼小期における専門職配置の提言」『松山東雲女子大学人文科学部紀要』第25号, 17-27.

- 3) 内閣府（2020）『令和2年版少子化社会対策  
白書』 p.15

#### 参考文献

1. 佐藤和順（2014）『保育者のワーク・ライフ・  
バランス—現状とその課題』, みらい.

八田清果 （埼玉東萌短期大学准教授）

